

多自然川づくり取り組み事例

タイトル：多自然川づくりの視点からの植生管理の考え方		
水系/河川名：—	河川分類：その他	
河川の流域面積：—	整備計画流量：—m ³ /s	セグメント：不明
事業：維持管理	事業開始年度	平成31年度
目標設定：定性的	段階	A(フィードバック時)
課題・目的(主な)：その他		
工法(主な)：樹木伐採、除根		
配慮事項(主な)：その他		

背景・課題、目標設定

<背景>

現在の維持管理での多自然川づくりの現状として、整備後に環境面の維持管理はほとんど行われていないことより、多自然川づくりが維持管理ができていないという問題にある。根本的な原因として管理方法が明確ではないということより、多自然川づくりの視点からの維持管理方法を検討が必要だと考えた。

中部地方整備局管内における多自然川づくりを推進するために、現場で実戦可能な維持管理方法として、「中部地方整備局版多自然川づくり手引き」を提案した。その中の一部である植生管理方法の検討事例を紹介する。

<課題>

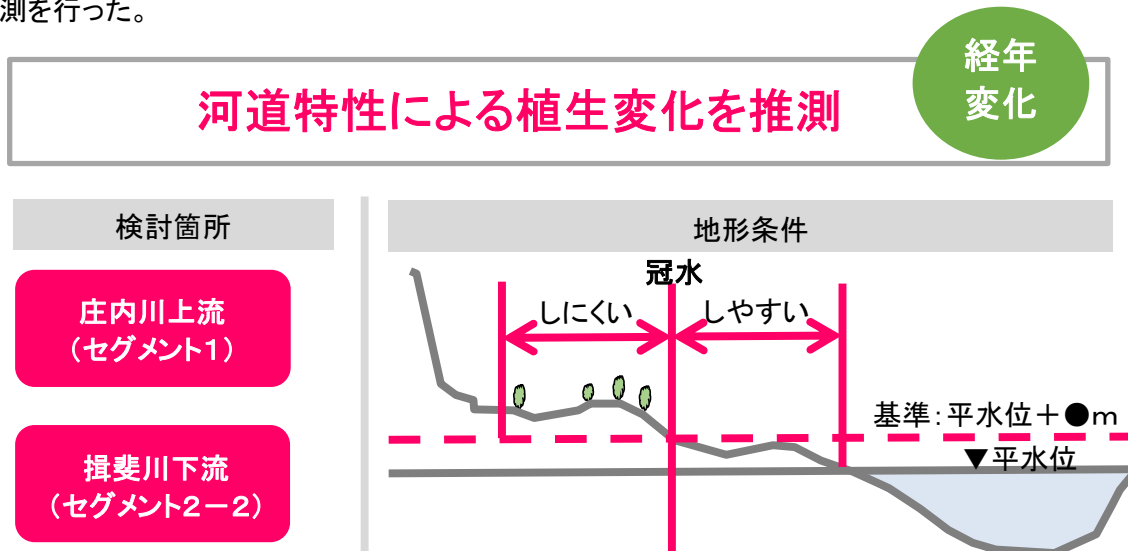
維持管理上の課題である「土砂の再堆積・樹林の再繁茂」にターゲットを絞り、樹林になってから伐採する「事後保全」から、樹林の傾向を早期に検知し対応する「予防保全」にシフトすることにより、多自然川づくりの視点から効率的な植生管理を行うことが必要であると考え。また、河川によって成立する植生や植生遷移の進行状況は異なるため、対象とする河川・区間の特性を十分に把握した上で、適切な河川管理の方法を戦略的に検討する必要がある。

<目標>

定期調査結果である、河川水辺の国勢調査及び定期横断測量の結果を基に、掘削後の植生遷移を可視化することで、河川・区間の特性に応じた予防保全の考え方に基づく植生管理・樹林化対策を検討する方法を提案する。

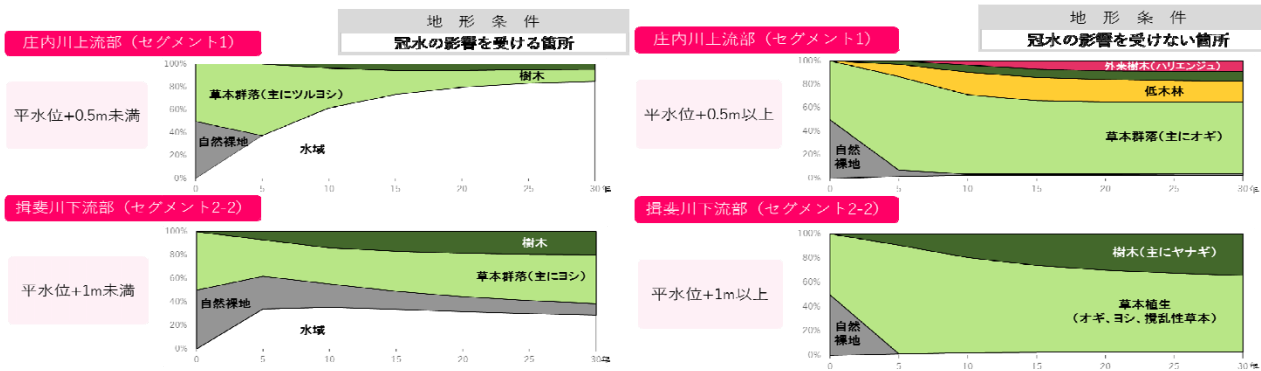
取り組み内容・対策例(1/2)

- ・対象河川での伐採・掘削後に予想される植生遷移を可視化するため、河川の水辺の国勢調査及び定期縦横断測量の結果を使用。30年間に渡る植生遷移を予測した。
- ・植生遷移は、地形条件によって異なることが想定されているため、平水位からの比高差に基づき、分けて予測を行った。



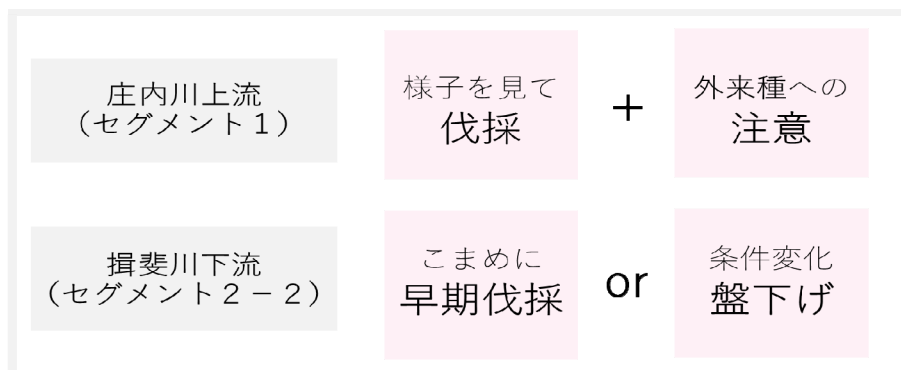
取り組み内容・対策例(2/2)

- ・冠水の影響を受けやすい箇所は、時間の経過とともに水域の範囲が変動する。
- ・河川と位置ごとに、グラフが違うことが見て取れる。
- ・河川・区間の特性により、植生遷移予測結果も変化する。



モニタリング結果、アピールポイント、今後の対応方針

- ・樹林化しやすいのは冠水の影響を受けない箇所。
- ・庄内川上流は安定して草地化しやすい。様子を見ながら伐採・外来種への注意が必要。
- ・揖斐川下流は早期に樹林化しやすい。
早期伐採を実施するか、盤下げにより冠水の影響を受けやすい高さにするか選択肢がある。
- ・一様な早期伐採をすれば良いというわけではなく、河川・区間の特性に合った対応と選択をしていく必要がある。



- ・中・長期的な植生遷移の予測は、樹林化に至る過程を可視化するだけでなく、伐採・掘削後の再繁茂に伴う伐採コストを推定し、推定したコストを基に最適な伐採サイクルを検討することに活用することが出来る。
- ・緊急3カ年治水対策で実施した伐採や河道掘削箇所をモニタリング予定より、データと知見を蓄積し、それらを用いて視覚的な管理を実施したい。
- ・「植生が変化していく姿を予測し、覚悟して、川を見る目が養われる」手助けになれば幸いと考える。

備考